

氏 名	キヨ 渠	ショウ 昭
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)	
学 位 記 番 号	人 博 第 268 号	
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当	
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻	
学位論文題目	切り絵のイコノロジー	

——民間芸術に見られる中国人の自然観を探る——

論文調査委員	(主 査)			
	教 授 高 橋 義 人	教 授 福 井 勝 義	教 授 狩 野 博 幸	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、伝統的信仰や習俗がよく保存されている中国黄河中流域に位置する山西省西南部の現地調査を踏まえ、民間切り絵(剪紙)と民俗宗教との関係、剪紙の文化的位置づけを考察し、それによって山西省一帯における民俗宗教的世界観を解明しようとするものである。

論文は3章に分かれる。第1章では切り絵の特性が論じられる。切り絵は科学が発達、細分化し、文化の近代化が進んでいる今日にありながら、宗教性、芸術性、生活性が深く混在している民俗文化である。人々は切り絵を通して、神と人間との心的交流を感じ、安らぎを得る。本論文はこのような切り絵作りの特性を分析し、人間と自然との原初的なコミュニケーションを観察しながら、切り絵のなかに民間芸術の原点を見ている。

調査地農村では、女性が切り絵文化の主役、主な作り手である。本論文はその理由を、村の日常生活で巫術が頻繁に使われること、巫術による願いの内容、という二側面から探っている。農村における巫術は、母親が子どものために行うものが大半である。女性たちは子どもたちが健康に育つようにと、切り絵を作って招魂し、暮らしの安寧を守ろうとする。その結果、女性は切り絵の担い手として巫術を受け継ぎ、また巫術を受け継ぎながら切り絵という民間芸術を発展させていった。切り絵は巫術的ニーズによって生き続けたものであると同時に、切り絵という芸術的形式は巫術をさらに豊かなものへと成長させていったのである。

第2章は、調査先の中陽県一帯の切り絵にしばしば見られるヒキガエル(蟾蜍)のモチーフを通して、人々の女神崇拝や女性の始祖崇拝に焦点をあて、その潜在的影響力について論じている。これまでの各種の先行研究ですでに、母系社会を特徴とした、中国の仰韶文化から出土した紋様であると突きとめられているヒキガエルは、調査先の農村における今日の民俗信仰の主な対象となっている。本論文は、ヒキガエルのモチーフのモチーフが象徴する女性の生殖力、無上の保護力という大きな2特徴を通して、ヒキガエル・モチーフの信仰と母系社会との関わりを考察している。さらにヒキガエルの模様を地元の年中行事・儀礼・民間信仰と比較対照しつつ、そこに女神信仰、始祖崇拝の存在を認め、この地域では、父系的・儒教的な「秩序」を強調する信仰と並んで、自然崇拝を含む古くからの始祖崇拝も存在している、という斬新な結論を導き出している。調査先の農村社会では、儒教の神々が堅固な廟宇に祀られている一方、儒教以前の信仰が、ヒキガエルなどの豊富で多彩な切り絵のモチーフに象徴的に表現されている。こうした切り絵はほとんどすべての住居に飾られ、生活のなかに根を下ろしている。黄河中流域の調査地一帯に広がる切り絵の状況、強い生命力の源について論じることにより、この地域における宗教文化の深層を解明している。

第3章では、今日、農村に暮す人々が自由自在な発想にもとづいて創作する龍や木などの切り絵のモチーフに即して、中国の伝統社会に特有の空間・時間認識、および審美観について考察している。龍のモチーフに見られる村人の自然観を中心にした考察は、そのひとつである。龍は中国文化では、歴代帝王に利用されてきたモチーフであったため、そのイメージには、政治・出世などに関連する部分が増幅されているが、本論文は農村での詳しい実地調査によって、その本来の意味を探

り出している。天地、生死に関する村人たちの世界観を踏まえつつ、龍の象徴性を探ることによって、村人たちにとって龍こそは天地、生死を超えるもの、自由を象徴する存在であることを解明している。また「走九曲」という民間遊戯に見られる龍を通して、調査先の村では、龍は祖先を祀る意味を持ちながら、村人たちが憧れる生と死の世界の交流に役立っていることも明らかにされている。

切り絵には一般の写真画とはまるで異なる切り絵特有の審美観が見られる。本論文は、切り絵の美的感覚へのアプローチを通して、そこに広がる「神話的時間・神話的空間」を確認するとともに、今日の農村女性の自然観、視覚の独特なあり方を考察している。この考察はさらに、農村の切り絵と西洋の近代絵画や一般的な宗教画との違いについての論究へと進み、農村女性の切り絵と西洋近代絵画との違いは、視線の性質の違いに由来すること、これら異なる二つの視線には、異なる社会制度、異なるコスモロジーが体现されていることを明らかにしている。さらに、中国農村の切り絵と一般宗教画との違いは、宗教画に見られるような教義や儀礼による縛りが切り絵にはないという点に求められることを確かめている。

このような比較研究によって、近代の多くの芸術作品が自然の表面的な形を模倣しているのに対して、切り絵は自然と人間との出会いを描き出していることが浮き彫りにされている。切り絵に、人間の魂と永遠なる自然との交流、および人間と自然との深い結びつきが表されているのはそのためであり、そこに描かれているのは、人と人、人と神との、何の隔たりもなく、魂が自由自在に交流する心の風景である。

これら3章を通して本論文は、中国の人々がはるか昔から抱きつづけてきた民間信仰の生きたすがたを具体的に浮かびあがらせている。さらに農村切り絵の考察を通して、生活のなかにある人生儀礼、年中行事が民俗宗教の形成といかに関わっているかを調べるとともに、このような人間の生の営みを通して民俗宗教の実情を把握し、彼らの世界観の展望を試みている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は宗教民俗学研究に属する。対象になっている地域は、中国山西省西南部の僻地にある6つの農村である。この地は、「数千年にわたる黄河文化が沈殿し、この土地に濃厚で豊かな特徴のある民俗文化層が形成された」と言われているところ、中国古代文明の始祖神話や伝説に登場する「伏羲」や「女媧」の活躍の場として知られるところである。

住民の多くが山の斜面に作られた「窑洞」に住み、近代化の流れの遠く及ばないこの地方には、中国古来の民間信仰がいまだに息づいている。この地に貴重な習俗が残されていることはすでに一部の研究者のあいだでは知られていたものの、ここがあまりにも辺鄙な地にあり、しかも途中の行路には山賊が出没するため、これまでこの地方の研究が本格的に行われることはなかった。そこで学位申請者は、運転手、護衛、連絡役、通訳、案内役を引き連れ、1994年と1995年の2回にわたってこの地のフィールド調査を行った。本論文はまず、調査困難な地で敢行されたフィールドワークの成果として高く評価されうるもので、今後なされるこの地の文化人類学的研究にとって重要な基礎資料となるであろう。

調査地が宗教民俗学にとって重要なのは、儒教・道教・仏教という中国の支配的宗教以前の民間信仰、すなわち自然崇拜や巫術が色濃く伝えられている土地だからである。この民間信仰は、調査地の日常生活の一部をなす剪纸（民間切り絵）のうちに明確に表れている。切り絵についてはこれまで、その概念や起源の探究、図像学的解釈、切り絵の交流史の歴史的探究、表現手法の探究などの面から研究が行われてきたが、本論文はそれら先行研究を踏まえながらも、これまではなかった切り絵へのアプローチを試みている。それは、①宗教民俗学の立場から切り絵に秘められた世界観を探り、②切り絵の図像をイコノロジー的に解釈し、③切り絵を通して行われる人々と神との心的交流を探ることである。本論文全体でこの試みは十分になしとげられ、論述も説得力のあるものになっている。

切り絵には儒教、道教、仏教に関係するものもあるが、基本をなすのは巫術に関わるものである。巫術といっても、専門のシャーマンではなく、普通の主婦が行うもので、巫術は申請者の調査地の日常生活のなかに深く浸透している。たとえば子どもの病気を治すために母親は切り絵を作り、身体から遊離した魂を子どものなかに返そうとする。日照りが続いたときには「簪天婆」の切り絵を作り、雨を降らせようとする。また生殖崇拜を象徴した「蓮」の切り絵を作って、子ども——特に祖先の魂を守護してくれる男の子——を授けようとする。数々の具体的な作品に即しながら、切り絵には祖先崇拜や自然崇拜（特に子どもを生む女性崇拜）が描かれていると論じている第1章は、生彩豊かな論考となっている。

第2章は、切り絵に描かれる数多のモチーフのなかから、特にヒキガエルを選び、それについて論じている。生殖と女性性を象徴しているヒキガエルは、村の人々の守り神である。保護神としてのヒキガエルは、中国の神話上の女神である女媧と深い関係を有している。申請者は、調査地における女媧を記念した祭りや儀礼や年中行事をもとにして、ヒキガエルは女媧という母系的始祖の象徴であると結論している。この論証には文献学的にまだ不十分なところがあるが、しかしこのような指摘によって、中国には「祖先」崇拜という儒教的側面の他に、「始祖」崇拜という民間信仰のあることが浮き彫りにされている。しかも「始祖」が女媧という「古い母」である以上、始祖崇拜があるということは、中国には儒教的な父系的宗教とは別に、母系的信仰もあるということになる。これは大胆にして画期的な結論で、さらに多くの論証が必要とはいえ、中国の精神史を書き直す意義を有していると認められる。

第3章ではまず、龍のモチーフに見られる村人の自然観が考察されている。雲や水のなかを自由に遊ぶことができ、時間や空間に拘束されない龍は、村人の心を引き付けて離さない魅力を有している。古代中国の人々は、天の川と地の川はもともと一本の川なのだと信じていた。そのような川を自由に往来できるのが龍であり、そのような龍を切り絵にして描くことにより、村人たちは内と外、生と死を超脱し、宇宙と一体化した境地に近づこうとした。龍に関するこのような村人たちの思いを、申請者は中陽県の村々で行われる「走九曲」という龍に関する民間遊戯を通して確認している。「走九曲」の分析を挿入することによって、龍に関する申請者の主張はより興味深く、より説得力のあるものになっている。

第3章ではさらに、切り絵にしばしば描かれる宇宙樹や生命樹についても考察されている。調査先の村のひとつには巨大な槐樹がそびえており、村人たちはこれを切り絵のなかに描いている。眼の前にある樹を宇宙樹として描きながら、村人たちは樹や宇宙と心を通わせつつ、自由に語り合っている。そう申請者は主張する。

自然との自由な心的交流。これこそは、本論文全体を通して主張されているものにほかならない。申請者は、中国の僻地においていまだに行われている切り絵のなかに、近代的な科学にも近代的な商業にも毒されていない村人たちの素朴な心を見いだした。近代的な自然観や近代的な審美観を批判したくだけだけでなく、本論文はその全体が「近代」に対する批判、間接的なながらも熾烈な批判になっている。

そのような性格を備えた本学位申請論文は、人間と自然との調和をめざして創設された文化・地域環境学専攻 環境保全発展論講座にふさわしい内容を有したものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年12月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。